



XenClient Enterprise Engine インストールガイド

バージョン 5.0

2013/08/12

目次

このガイドについて	4
互換性のチェック	4
互換性チェッカーのダウンロードと実行	4
BIOS の設定	4
インストールの選択	5
ディスクの暗号化	5
ディスク全体を使用してインストールするか、未割り当てのスペースを使用してインストールするか	5
CD または DVD メディアを使った PC 上への XenClient Enterprise Engine のインストール	7
USB メモリスティックの使用による XenClient Enterprise Engine のインストール	8
USB インストーラーの作成	8
USB インストーラーを使用したインストール	10
デュアルブートインストール	11
未割り当て領域を作成するためのハードドライブ上のパーティションのサイズ変更	12
デュアルブートのための XenClient Enterprise Engine のインストール	18
XenClient Enterprise Engine のインストールのための PXE ブートの使用	19
PXE ブートサーバーのインストール	21
Engine の無人インストール	22
既存の XenClient Enterprise Engine のアップグレード	22
付録 : client.ini ファイルのサンプル	24

Copyright © 2012 Citrix All Rights Reserved.

バージョン : 2.1

Citrix, Inc.

851 West Cypress Creek Road

Fort Lauderdale, FL 33309

United States of America

このドキュメントは現状有姿のまま提供されます。Citrix Inc.は、このドキュメントの内容に関し、商品性および特定目的適合性についての黙示保証を含むが、それに限定することなく、いかなる保証も行わないものとします。このドキュメントには、技術的またはその他の観点で不正確な記述、あるいは印字エラーが含まれている可能性があります。Citrix Inc.は、このドキュメントに含まれている情報を予告なく随時変更する権利を留保します。このドキュメントおよびこのドキュメントに記載されているソフトウェアは、Citrix, Inc.およびそのライセンス付与者の機密情報であり、Citrix, Inc.によるライセンス許諾に基づいて提供されます。

Citrix Systems, Inc.、Citrix ロゴ、Citrix XenClient は、米国およびその他の国における Citrix Systems, Inc.の商標です。このドキュメントに記載されているその他のすべての製品またはサービスは、該当する各社の商標または登録商標です。

Citrix Systems, Inc.は、このドキュメントで使用されているすべての商標を承認しています。Linux は Linus Torvalds の登録商標で、Ubuntu は Canonical Ltd.の登録商標です。Windows は Microsoft Corporation の登録商標です。すべての商標は、該当する各社の財産です。

このガイドについて

このドキュメントでは、コンピューター上への XenClient Enterprise Engine のインストールおよびアップグレードに関する情報について説明します。一般的なインストールについてのガイドラインおよび互換性の検証について示しています。

-  XenClient Enterprise Engine に対する以降の更新プログラムは、XenClient Enterprise Synchronizer（管理アプリケーション）、CD/DVD、または USB メディアからダウンロードできます。

互換性のチェック

XenClient Enterprise Engine は、さまざまな種類のパーソナルコンピューターで実行できます。ハードウェア要件は次のとおりです。

- Intel-VT（VT-x）または AMD-V ハードウェア仮想化テクノロジーを使用する Intel または AMD のデュアルコアプロセッサ。
-  Intel は、コンピューター内のチップが仮想化をサポートしているかどうかを確認するツールを提供しています。<http://processorfinder.intel.com/>.
- 2GB の RAM。複数の仮想マシンを同時に実行する場合に円滑な動作を得るため、4GB を推奨します。
- 60GB の空きディスクスペース。複数のオペレーティングシステムを実行する場合は、さらにディスクスペースが必要になります。

ディスク全体にインストールする場合、XenClient Enterprise Engine はハードドライブ全体を使用して、ネイティブにインストールされているオペレーティングシステムとファイルを置き換えます。XenClient Enterprise Engine と仮想マシンでディスク全体を使用します。

互換性チェッカーのダウンロードと実行

Citrix では、ご使用のコンピューターで Engine が動作するかどうかを確認する容易な方法を提供しています。Citrix の Web サイトで [XenClient Platform Check](#) を参照して、ご使用の既存の Windows マシンが Engine を実行するのに必要な仮想化をサポートしているかどうかを確認してください。

BIOS の設定

Engine をサポートするには、システムが仮想化をサポートしている必要があります。BIOS 設定についても、次の条件を満たすように設定する必要があります。

Virtualization : 有効（選択）

VT : 有効（選択）

Trusted Execution : オフ (選択解除)

Lenovo コンピューターの場合は、次を設定します。

Timer wake with battery : 有効

 BIOS の設定を変更した場合は、コンピューターを再起動しないと変更が反映されません。システムによっては、コンピューターの電源を切って数分待ってから、もう一度電源を入れる必要があります。

インストールの選択

Engine のインストール時に、ユーザーは Engine の動作に影響する 2 つの判断を下す必要があります。このセクションでは、選択する内容とその効果について説明します。選択する内容がわからない場合は、XenClient 管理者に問い合わせてください。選択には、ディスクの暗号化、およびディスク全体を使用してインストールするか未割り当てのスペースを使用してインストールするかがあります。

ディスクの暗号化

ハードドライブを暗号化できます。ハードドライブ上のすべてのデータが暗号化され、登録所有者のパスワードを入力しなければアクセスできなくなります。ユーザーのパスワードを入力しないと、Engine を開始できません。ユーザーがログインすると、ハードドライブがアクセス可能になり、ユーザーは暗号化による違いを意識することはありません。

ディスクの暗号化は、適切な認証がないとアクセスできないため、強力なセキュリティ機能です。唯一の欠点は、CPU の使用率がわずかに (数パーセント) 上昇することです。

ディスク全体を使用してインストールするか、未割り当てのスペースを使用してインストールするか

Engine は、ディスク全体、またはパーティション化されたディスクの未割り当てのスペースにインストールできます。これらの方法を使用するときは、次について考慮してください。

- ディスク全体にインストールする場合、Engine はハードドライブ全体を使用して、ネイティブにインストールされているオペレーティングシステムとファイルを置き換えます。Engine と仮想マシンでディスク全体を使用します。詳細については、「CD または DVD メディアを使った PC 上への XenClient Enterprise Engine のインストール」を参照してください。
- パーティション化されたディスクの未割り当てのスペースにインストールする場合、ディスクのパーティション作成ツールを使用して、既存のパーティションからスペースを削除する必要があります。このようにした後で、Engine を未割り当てのスペースにイ

インストールします。未割り当てのスペースには、Engine、および想定している仮想マシンに十分なスペースが必要です。Engineは既存のオペレーティングシステムを置き換えずに共存できますが、一度に実行できるオペレーティングシステムは 1 つのみです。詳細については、「デュアルブートインストール」を参照してください。

XenClient Enterprise Engine のインストール

このセクションに示す手順に従って、パーソナルコンピュータに Engine をインストールします。

- ① Engine をコンピュータにインストールすると、ネイティブのオペレーティングシステムやデータが削除されることがあります。インストールする前に、保存しておく必要のあるデータをコンピュータからバックアップしておいてください。

最初に PXE ブートまたは USB メモリスティックのいずれかを介して、もしくは CD または DVD から、Engine をインストールできます。

1. Engine のインストール ISO ファイルをダウンロードします。

- ① 場合によっては、MD5 チェックサムを検証して、ISO ファイルの有効性を確認する必要があります。MD5 ファイルの計算と比較に使用できるフリーウェアのツールがいくつかあります（例: <http://download.cnet.com/MD5-Checksum-Calculator/3000-2092-4-10964258.html>）。

2. ISO イメージファイルを起動可能な CD または DVD 上に焼くためのユーティリティを使用します。または、UNetbootin を使用して、USB インストーラーを作成できます。

フリーウェアまたはシェアウェアには、この用途に使用できるユーティリティがいくつかあります。

- ① CD または DVD が確実に起動可能か、ツールの設定をチェックします。

CDまたはDVDメディアを使ったPC上へのXenClient Enterprise Engine のインストール

PC に Engine をインストールするには、ネイティブのオペレーティングシステムを置き換えます。

1. XenClient Enterprise インストールメディアをラップトップコンピュータの CD または DVD ドライブ内に読み込みます。
2. 最初の手順画面を読み、**Enter** キーを押します。
3. ユーザーライセンス契約を読みます。矢印キーを使って文章をスクロールさせます。**Enter** キーを押してライセンス契約に同意します（または **Esc** キーを押して拒否し、インストールを終了します）。

4. このインストールでドライブ全体を使用する場合は、タブキーを使用して [ディスク全体] (またはインストールを終了する場合は [停止]) を選択し、**Enter** キーを押します。
5. 上または下矢印キーを使用して、インストールに使用する言語 (キーボード) を選択し、**Enter** キーを押します。
6. 以前の Engine の上にインストールする場合は、バージョンをアップグレードするか、すべてのユーザー情報と仮想マシンを含めて古い Engine を置き換えるかを選択できます。



既存の Engine を置き換えている場合は、古いバージョンの Engine が削除された後にインストール処理が最初から再開します。

7. コンピューター名を入力して **Enter** キーを押し、次の画面に進みます。このコンピューターは、主にここで入力する名前によって XenClient Enterprise Synchronizer 上で識別されます。
手順に戻り、**Tab** キーを使用して [戻る] を強調表示し、**Enter** キーを押します。
8. コンピューターのアセットタグを入力し、**Enter** キーを押します。
9. 矢印キーを使用して、ディスク暗号化を使用するかどうかを選択し、**Enter** キーを押して次の画面に移動します。
10. 選択した内容とともに、ディスク全体へのインストールを続行する場合は、ディスク上のすべてのデータが消去されるという警告が表示されます。インストールの概要が正しい場合は、「yes」と入力して **Enter** キーを押し、Engine をインストールします。
Engine がインストールされ、進行状況バーが表示されます。インストールが完了すると、コンピューターが再起動します。

USBメモリスティックの使用によるXenClient Enterprise Engineのインストール

このセクションでは、Engine のインストールデバイスとして USB スティックを設定する方法を説明します。この方法を使用して Engine をインストールするには、少なくとも 2GB の USB スティックが必要です。また、このセクションの手順を正しく使用するには、Citrix 社の Web サイトから UNetbootin ソフトウェアをダウンロードする必要があります。

USBインストーラーの作成

まず、最新の Engine ISO と UNetbootin を Citrix 社のダウンロード [ポータル](#) からダウンロードします。



別の場所から UNetbootin 配布ファイル入手した場合は、バージョン 549 以降であることを確認してください。

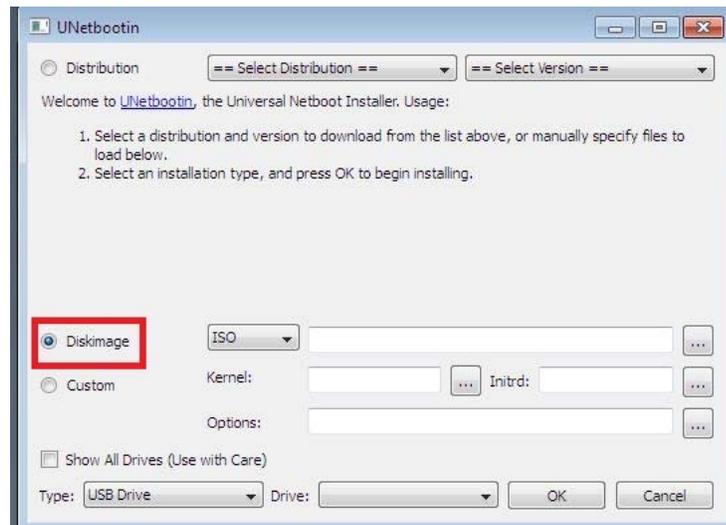


ダウンロードページにアクセスするには、サイトで登録を済ませる必要があります。

ISO と UNetbootin のダウンロードが完了すると、USB インストーラーの作成プロセスを開始できます。

USB インストーラーを作成するには、次の手順に従います。

1. まず、UNetbootin を開き、**【DiskImage】** を選択します。

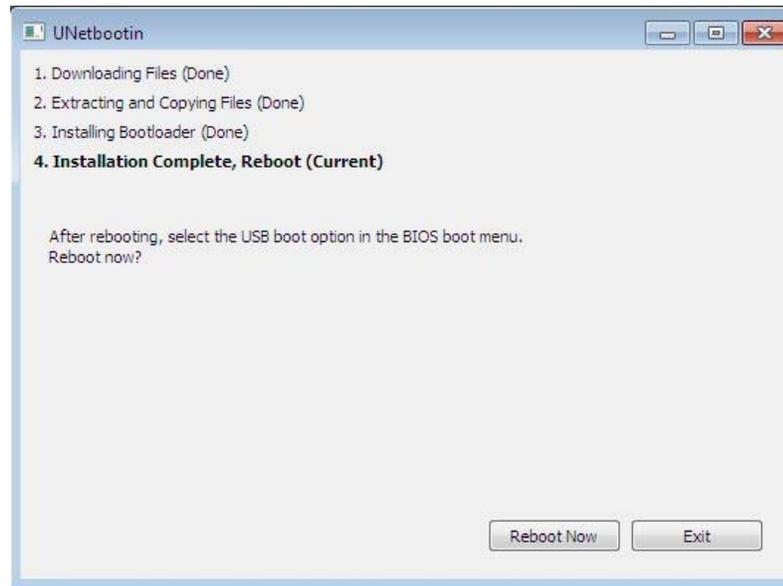


2. ISO の場所を選択します。**【Diskimage】** ラジオボタンを選択し、ファイルの場所を参照します。
3. ISO の場所を選択したら、ドロップダウンメニューを使用して、インストーラーを作成する USB スティックのドライブ文字を選択します。



4. **【OK】** をクリックすると、インストーラー作成の進行状況が表示されます。

5. 作成が完了したら、[Exit] をクリックします。



UNetbootin プロセスが完了したら、デスクトップまたはラップトップのブートメニューから USB を選択すると、Engine がインストールされます。

USBインストーラーを使用したインストール

USB ドライブを使用してインストールする場合は、次の点に考慮してください。

- コンピューターの BIOS 設定が、USB ベースのメディアから起動可能になっていることを確認します。
- コンピューターの起動シーケンスを設定すると、取り付けられている任意の USB デバイスから自動的に起動できます。BIOS>BOOT 設定セクションにあるマシンの起動順序で、USB ドライブをローカルディスクの上位に移動します。
-  USB ドライブがプライマリ起動デバイスになるように起動順序を変更した場合は、必ず次に再起動する前に、インストーラーが含まれた USB スティックを取り外してください。取り外さないと、Engine が再インストールされることがあります。
- USB デバイスの起動順序がローカルディスクより下位になっている場合や、指定されていない場合は、起動順序のメニューキー（通常は F12）を選択します。

USB インストーラーを使用して Engine をインストールするには、次の手順に従います。

1. コンピューターをシャットダウンします。
2. USB ドライブを使用可能なスロットに差し込みます。
3. コンピューターを再起動します。



USB ドライブから起動するには、起動順序を変更して、システムの起動時にローカルディスクが USB ドライブの下位になるようにします。

4. エンドユーザーのライセンス契約を読み、同意します。
5. このインストールでドライブ全体を使用する場合は、タブキーを使用して **【ディスク全体】**（またはインストールを終了する場合は **【停止】**）を選択し、**Enter** キーを押します。
6. 上または下矢印キーを使用して、インストールに使用する言語（キーボード）を選択し、**Enter** キーを押します。
7. 以前の Engine の上にインストールする場合は、バージョンをアップグレードするか、すべてのユーザー情報と NxTop 仮想マシンを含めて旧バージョンを置き換えるかを選択できます。
8. コンピューター名を入力して **Enter** キーを押し、次の画面に進みます。このコンピューターは、主にこの名前により Synchronizer 上で識別されます。
手順に戻り、**Tab** キーを使用して **【戻る】** を強調表示し、**Enter** キーを押します。
9. コンピューターのアセットタグを入力し、**Enter** キーを押します。
10. 矢印キーを使用して、ディスク暗号化を使用するかどうかを選択し、**Enter** キーを押して次の画面に移動します。
11. 選択した内容とともに、ディスク全体へのインストールを続行する場合は、ディスク上のすべてのデータが消去されるという警告が表示されます。インストールの概要が正しい場合は、「**yes**」と入力して **Enter** キーを押し、Engine をインストールします。

Engine がインストールされ、進行状況バーが表示されます。インストールが完了すると、コンピューターが再起動します。
12. 完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。不明な場合は、IT 管理者に問い合わせてください。
13. ユーザー名とパスワードを入力します。このユーザー名とパスワードによって、選択した Synchronizer 上でこのユーザーが識別され、コンピューターが登録されます。

Engine をいったんインストールすると、必要に応じて自動更新を設定できます。ユーザーがログインすると、Synchronizer はそのユーザーに割り当てられた仮想マシンを送信します。

デュアルブートインストール

デュアルブート機能により、2つ目もしくは3つ目のオペレーティングシステムとしてコンピュータ上に Engine をインストールできます。Engine には、ネイティブオペレーティングシステムまたは Engine の起動を選択できるマルチブートローダーが含まれています。このいずれかは、Windows オペレーティングシステムである必要があります。Engine がインストールされていても、非 Windows のゲストにはアクセスできないことがあります。

-  ディスクパーティションツールには、次のいくつかを使用できます。Windows XP ベースのコンピュータの場合、Citrix では [EASEUS Partition Master Home Edition](#) を使用して、このマニュアルで手順をテスト済みです。Vista および Windows 7 の場合は、ネイティブのディスクマネージャーを使用してパーティションを作成してください。

次のデュアルブートをセットアップするため手順は、Windows XP および Windows 7 オペレーティングシステム上でテストされています。デュアルブートのインストールは、次の2段階で構成されます。

- 第1段階では、ハードドライブのパーティションのサイズを変更して、**未割り当て**の領域を作成します（最小60GB）。サードパーティ製のパーティション作成ソフトウェアをインストールし、Windows XP のマシンに Engine をインストールします。Windows 7 にはパーティション作成ツールが付属しています。両方の Windows オペレーティングシステムがハードドライブにある場合は、Windows 7 の手順を使用してください。

-  一定期間使用されていたシステムに再度パーティションを作成する場合は、事前にディスクデフラグを実行しなければならないことがあります。ディスクデフラグを実行しないと、連続した空き領域がないために、オペレーティングシステムがボリュームを縮小するのに十分な領域を解放できなくなります。

- 第2段階では、第1段階で作成したハードドライブの未割り当て領域に Engine をインストールします。Engine のインストールは、CD、DVD、USB 記憶域デバイス、または PXE サーバーから実行できます。

インストールが完了したら、ユーザーはシステムに電源が入られるたびに、ネイティブの Windows オペレーティングシステムを起動するか、または Engine を起動するかを選択できます。

-  Engine および含めようとする仮想マシンのサイズが未割り当て領域に収まるように、領域を選択します。

未割り当て領域を作成するためのハードドライブ上のパーティションのサイズ変更

Engine および仮想マシンのための十分な（60GB 以上）未割り当て領域を作成するため、オペレーティングシステムのパーティション化ツールを使って既存のディスクパーティションのサイズを変更します。

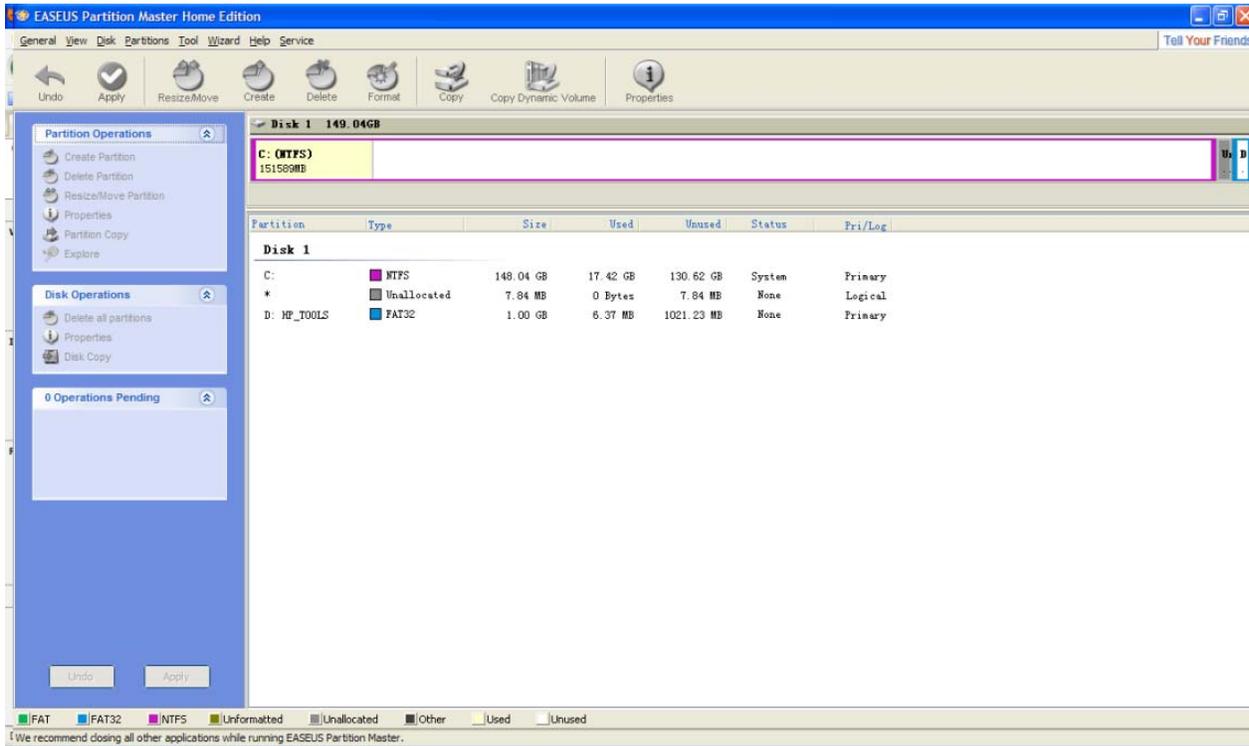
Windows XP システムの場合：

1. ネイティブオペレーティングシステム内からパーティション化ソフトウェアインストールして実行します。



ここでは、EASEUS Partition Manager Home Edition を使用します。ほかのツールの場合には操作内容がわずかに違う可能性があります、同様の機能によって同じ結果に帰着します。

2. パーティション化ツールを起動します。



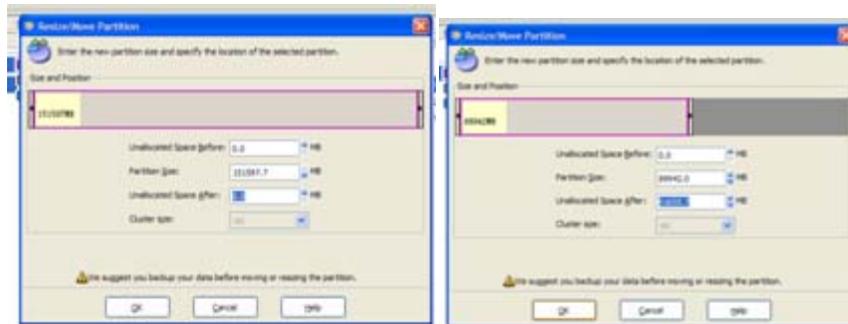
3. 変更するハードドライブを選択し、[Resize] ツールを選択します。



Engine は、システムの最初のドライブ上にのみインストールされます。



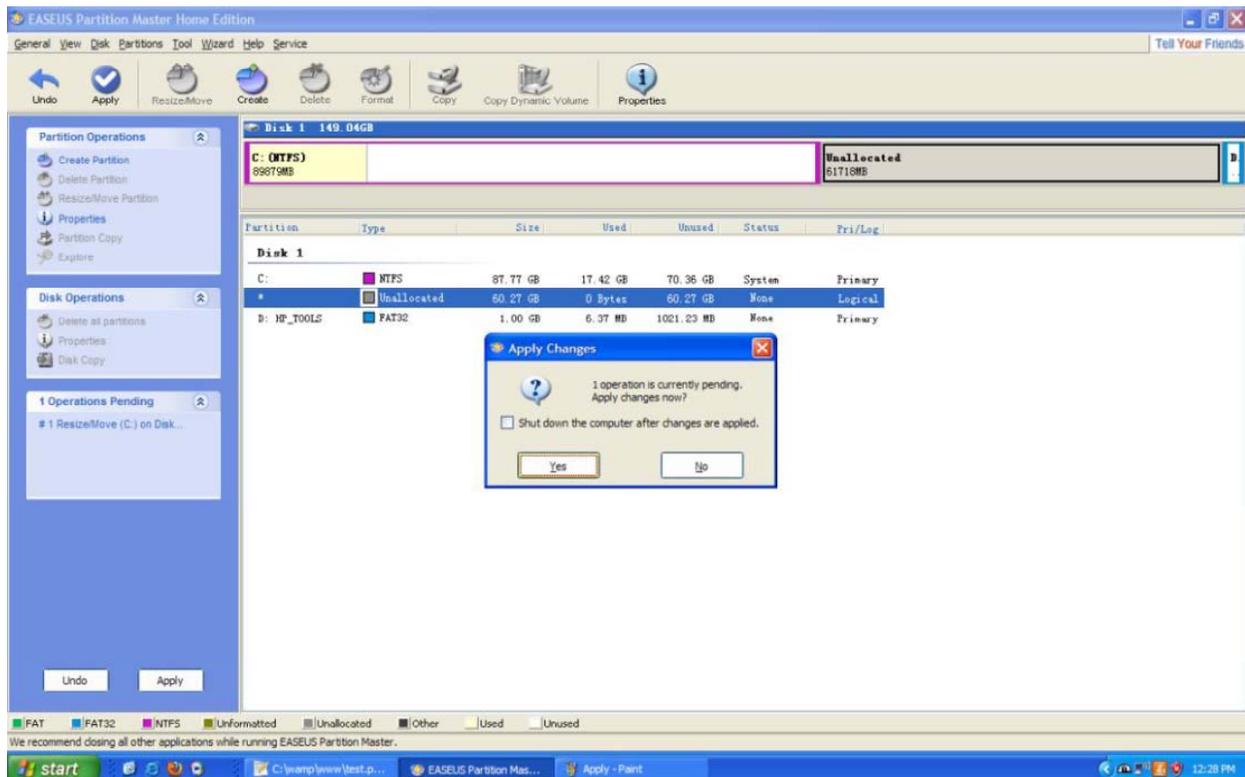
4. パーティションのサイズを変更し、最低 60 GB の未割り当て領域を確保します。Engine および Engine に含めようとする仮想マシンのサイズが未割り当て領域に収まる必要があります。使用計画に即した領域を選択してください。



5. 変更を適用し、コンピューターをシャットダウンします。多くのパーティション化ソフトウェアでは、ディスクに対する変更が完了したら自動的に再起動が実行されます。

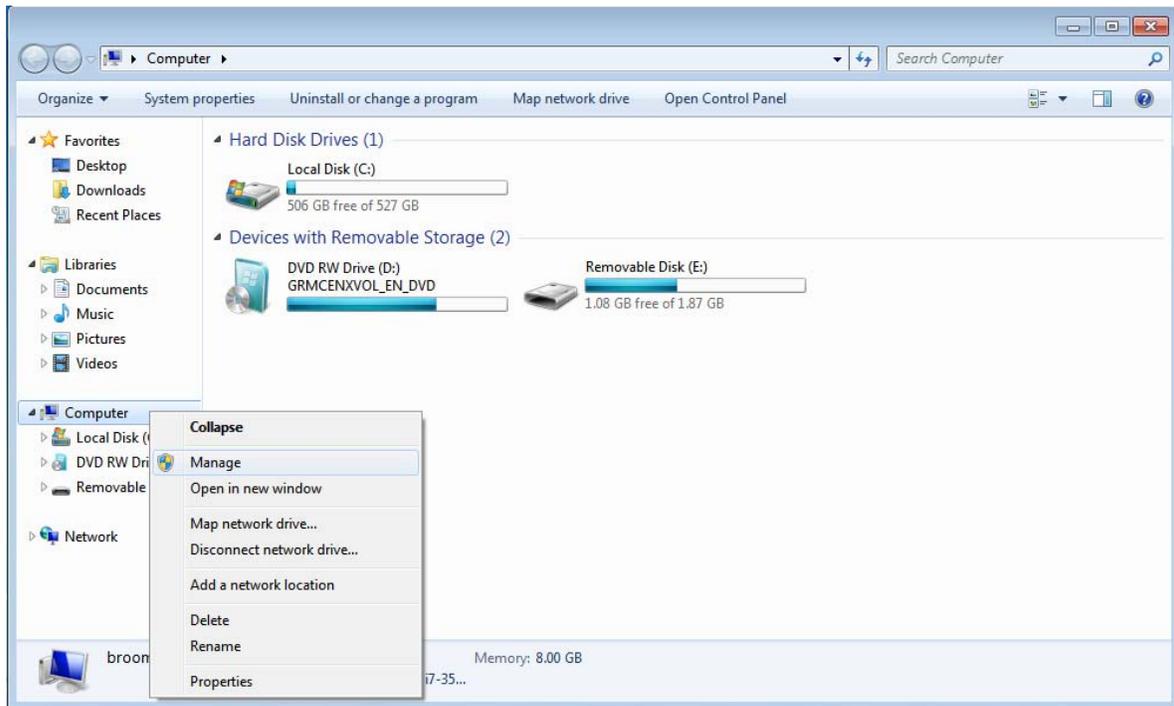


[Apply] を選択し、結果の確認を求めるダイアログボックスで **[Yes]** をクリックしたら、ハードドライブが変更されます。パーティションのサイズを変更して、データの損失を防ぎます。

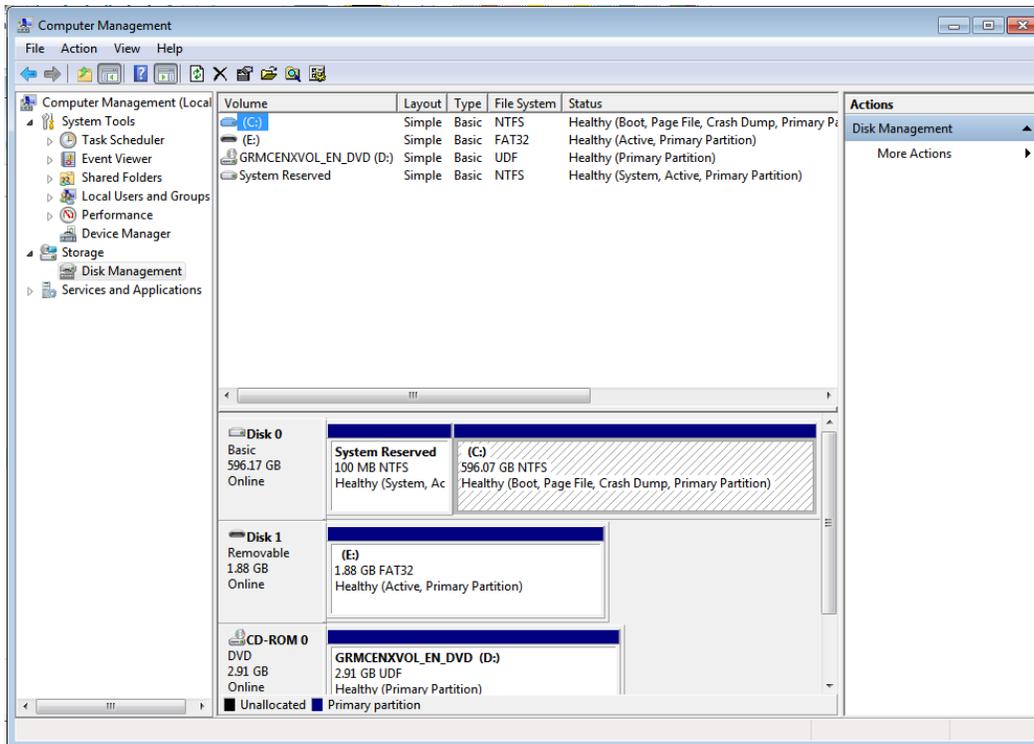


Windows 7 システムの場合 :

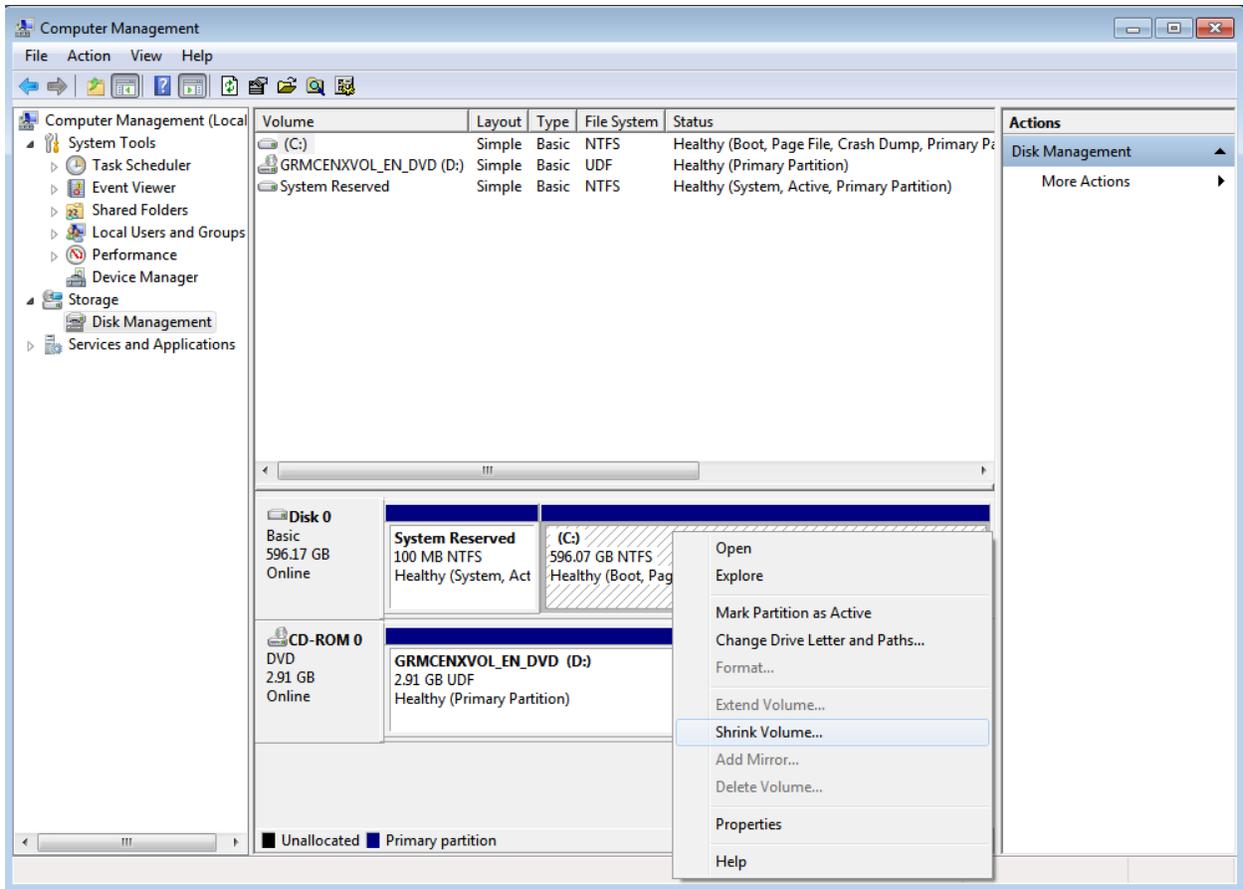
1. エクスプローラーを開きます。
2. 左側のペインで [コンピューター] を右クリックして、[Manage] を選択します。



3. [コンピューターの管理] ウィンドウが開いたら、[記憶域] > [ディスクの管理] の順に選択します。



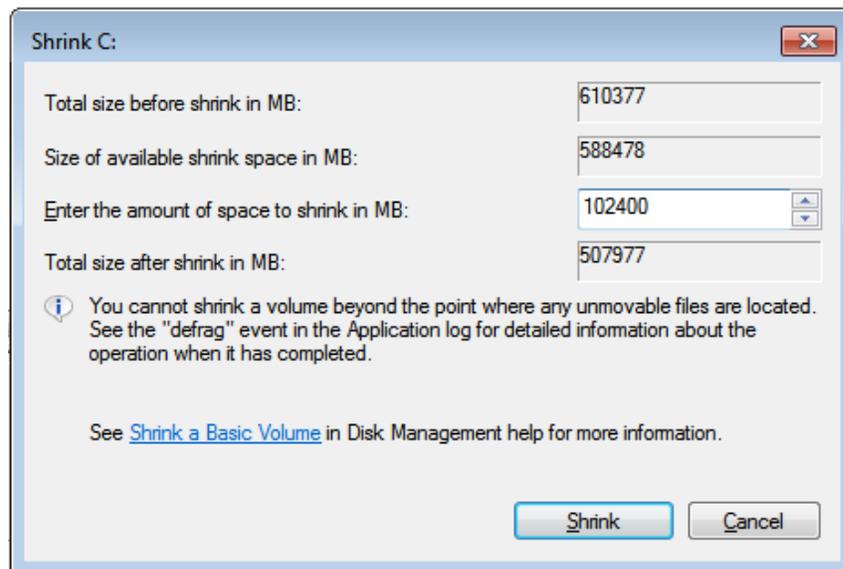
4. Engine をインストールするディスクを右クリックし、**[ボリュームの縮小]** を選択します。



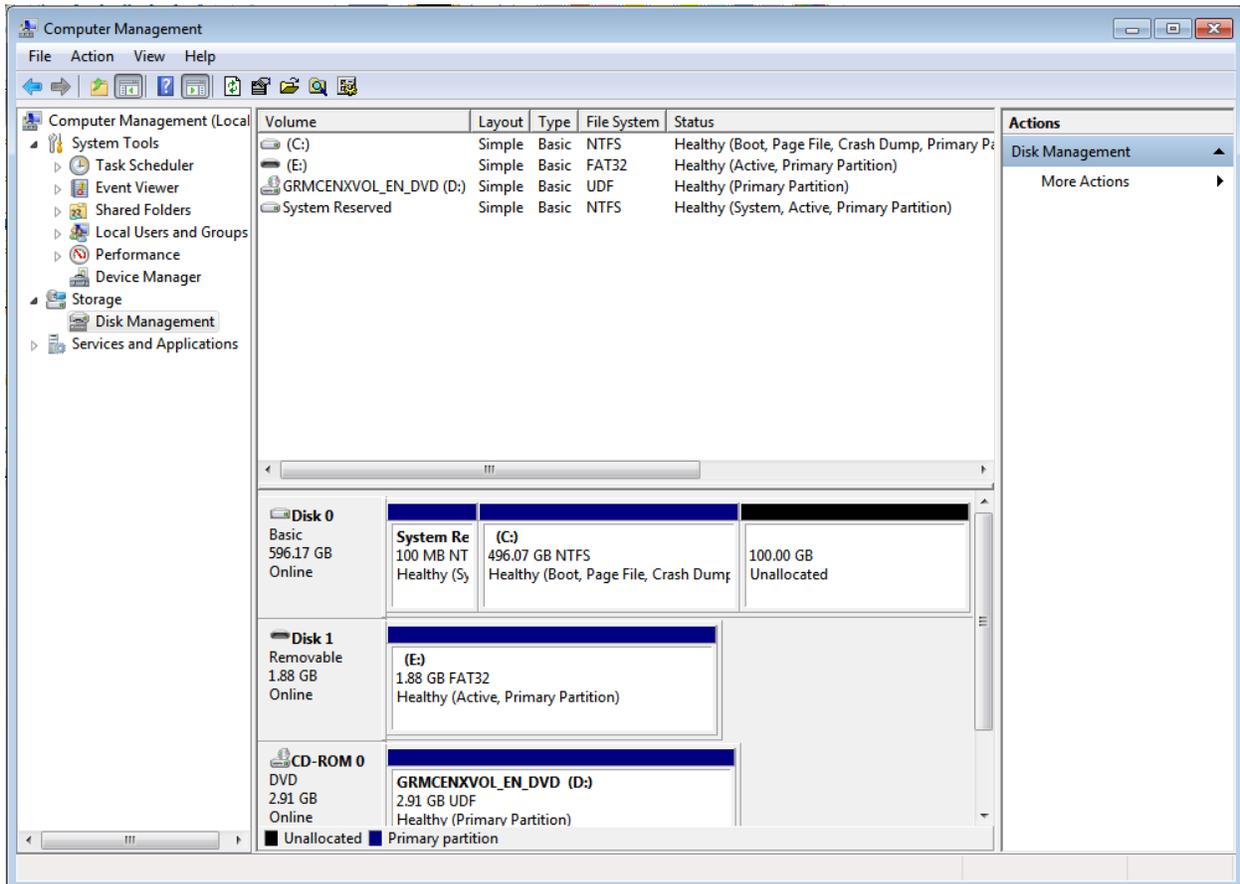
5. ボリュームの縮小サイズを MB 単位で入力し、【縮小】を選択します。



【縮小】をクリックするとハードドライブが変更されます。パーティションを適切なサイズに変更する必要があります。10240 は 10GB です。



6. 未割り当て領域が、Disk 0 パーティションで最低 59.99 GB と表示されるようになりました。



デュアルブートのためのXenClient Enterprise Engineのインストール

Engine をインストールするために未割り当て領域を作成する場合、Engine およびネイティブオペレーティングシステムはコンピューター上に並行して存在できます。コンピューターを実行する場合、使用するオペレーティングシステムを選択できます。

このようなインストールを実行する前に、ハードドライブ上にパーティションを作成します。Engine および仮想マシンはパーティション内の領域を使用するため、パーティションのサイズはそれに準じたものとします。実質的な最小サイズは、読み込まれる仮想マシンの総ディスクサイズに 10GB をプラスしたものとなります。

1. XenClient Enterprise インストールメディアをラップトップコンピューターの CD または DVD ドライブ内に読み込みます。
CD または DVD ドライブからコンピューターが自動的に起動しない場合は、一般的には F12 キーを押してブートメニューにアクセスし、起動デバイスを選択します。
2. 最初の手順画面を読み、**Enter** キーを押します。

3. ユーザーライセンス契約を読みます。矢印キーを使って文章をスクロールさせます。**Enter** キーを押してライセンス契約に同意します（または **Esc** キーを押して拒否し、インストールを終了します）。
4. コンピューターのハードドライブにパーティションがあり、十分な未割り当て領域がある場合は、その未割り当て領域に Engine をインストールし、既存のオペレーティングシステムはそのままにしておくことができます。**Tab** キーを使って **【使用可能な領域】** を選択し **Enter** キーを押します。
5. 上または下矢印キーを使用して、インストールに使用する言語（キーボード）を選択し、**Enter** キーを押します。
6. コンピューター名を入力して **Enter** キーを押し、次の画面に進みます。このコンピューターは、主にこの名前により Synchronizer 上で識別されます。

手順に戻り、**Tab** キーを使用して **【戻る】** を強調表示し、**Enter** キーを押します。

7. コンピューターのアセットタグを入力し、**Enter** キーを押して次の画面に進みます。
8. 矢印キーを使用して、ディスク暗号化を使用するかどうかを選択し、**Enter** キーを押して次の画面に移動します。
9. 選択した項目の概要が表示されます。インストールの概要が正しい場合は、「**yes**」と入力して **Enter** キーを押し、Engine をインストールします。

Engine がインストールされ、進行状況バーが表示されます。インストールが完了すると、コンピューターが再起動します。

10. 完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。不明な場合は、IT 管理者に問い合わせてください。
11. ユーザー名とパスワードを入力します。このユーザー名とパスワードによって、選択した Synchronizer 上でこのユーザーが識別され、コンピューターが登録されます。

Engine をいったんインストールすると、必要に応じて自動更新を設定できます。ユーザーがログインすると、Synchronizer はそのユーザーに割り当てられた仮想マシンを送信します。

XenClient Enterprise EngineのインストールのためのPXEブートの使用

Preboot eXecution Environment (PXE、または'pixie') は、（ハードディスクのような）利用可能なローカルデータストレージデバイスまたはインストールされたオペレーティングシステムに依存しないネットワークインターフェイス を使ってコンピューターを起動する 環境です。つまり、PXEによってコンピューターをローカルハードディスクの代わりにネットワークサーバーから起動できます。

Citrix の実装で使用される場合、コンピューターはサーバーから Engine の更新プログラムをダウンロードし、その更新バージョンを起動します。新しいバージョンは更新として処理され、登録ユーザーに対する情報および仮想マシンは維持されます。このトピックでは、Engine 上での PXE ブートの使用手順について説明します。

-  仮想マシンを使用する PXE 起動手順（パーソナル仮想マシンなど）では、Engine の DHCP サービスを NAT モードで使用するのではなく、ネットワークインターフェイスカードがブリッジモードになっていることを確認して、パーソナル仮想マシンの DHCP サービスを使用してください。

以下では、Engine をダウンロードしてインストールするための PXE ブートサービスのセットアップ方法について説明しています。

PXEブートサーバーのインストール

Web サーバー共にコンピューター上に PXE サーバーをインストールします。

使用可能なものとして、Windows RIS（リモートインストールサービス）、Redhat Linux PXE ブートサービス、および FOG Server など、複数の PXE ブートサービスがあります。以下の例は Linux ベースのサーバーに対するものですが、すべての PXE ブートサービスで同様の構成を使用します。

1. 最新の Engine インストーラー ISO をダウンロードします。
2. Web ドキュメントルートの下に xenclient-VERSION NUMBER ディレクトリを作成し、ダウンロードした Engine ISO をそこにコピーします。
xenclientengine.iso ファイルの名前を変更します。
3. 次の 4 つのファイルを展開します。
 - initrd.img
 - vmlinuz
 - mboot.c32
 - xen.gz
4. ファイルを次のように PXE サーバーにコピーします。
 - mboot.c32 を tftpboot ルートディレクトリにコピーします。
 - tftpboot ルートディレクトリに対して Engine ディレクトリを作成し、残りの 3 つのファイル（initrd.img、vmlinuz、xen.gz）をそのディレクトリにコピーします。
5. オプションで Engine を自動的に受け取るためのクライアントの一覧を作成し、xenclientengine.iso ファイルと同じ Web ドキュメントの場所（\$WEB_ROOT/xenclient-5.0）にある client.ini という INI ファイルの一覧にそれを追加します。client.ini の形式について詳しくは、以下の情報を参照してください。



このドキュメントの最後にサンプルの client.ini ファイルが付録されています。

6. 次の 3 つの行を /pxelinux.cfg/default ファイルに追加して、インストーラーを起動します（xenclient-[version number]が起動オプションとして表示されます）：



append から始まる 3 つ目の行は、3 つのダッシュ (---) で 3 つのグループに分けられた複数のオプションを含んでいる長い一行です。この行を構成ファイル内にコピーする場合、複数行に分割しないでください。

```
LABEL xenclient-<VERSION NUMBER>
kernel mboot.c32
append xenclient-<VERSION NUMBER>/xen.gz dom0_mem=2048M --- xenclient-<VERSION
NUMBER> /vmlinuz boot=casper
webboot=http://<IP_address>/dom0/xenclientengine.iso ro quiet console=tty8
```

```
vc_config=http://<IP_address>/client.ini --- xenclient-<VERSION NUMBER>  
/initrd.img ---
```

ここで **IP_address** は、xenclientengine.iso（および使用される場合は client.ini ファイル）を含む PXE サーバーの IP アドレスです。



“**vc_config=**”パラメーターはオプションです。dom0_mem=2048M 行は、XenClient Enterprise 4.1 インストールに対してのみ使用する必要があります。4.0.x より前のリリースではこのパラメーターは必要ありません。

7. IP_address を xenclientengine.iso（および使用される場合はクライアントの一覧）を含む PXE サーバーの IP アドレスと置き換えます。イメージのダウンロード時には DNS を initramfs で使用できないため、ドメイン名ではなく IP アドレスが**必要とされます**。

Engineの無人インストール

オプションで、電源を入れてネットワークに参加する時に Engine ISO を受信してインストールする必要があるコンピューターの一覧を指定できます。PXE ブートサーバーは対象のコンピューターの MAC アドレスを認識し、そこに ISO を送信してインストールします。クライアントコンピューターの一覧は、Engine ISO と共に保管されている client_list という名称の CSV ファイルに保存されています。

サンプルである注釈付きの client.ini ファイルは、インストールメディアの **extra/ms-client.in** に置かれています。このファイルは、複数の .INI セクションで形成されています。

- [GLOBAL] – このセクションの設定は、MAC アドレスに関係なくすべてのマシン接続に適用されます。
- [XX:XX:XX:XX:XX] (MAC アドレス) – このセクションの設定は、GLOBAL の設定より優先されます。



autoinstallation および **autoregistration** に対して必要なパラメーターは別々です。自動登録をすることなく、自動インストールを実行できます。

既存のXenClient Enterprise Engineのアップグレード

このセクションでは、既存の Engine のアップグレードについて説明します。アップグレードプログラムは、インストール CD や USB インストーラーを使ってインストールしたり、Synchronizer の Software Library にインポートしてから登録済みのクライアントコンピューターにダウンロードしたりすることができます。

Engine をアップグレードするには

1. [Citrix Customer Portal](#)にログインして更新プログラムをダウンロードします。
2. **[XenClient Enterprise Engine Upgrade Kit]** リンクをクリックします。
3. Synchronizer をホストしているサーバー上の Synchronizer ファイルインポートフォルダー（デフォルトでは、c:\ProgramFiles\Citrix\Synchronizer\File Import）か、または Synchronizer からアクセスできるローカルネットワークのどこかに修正プログラムを保存します。
4. 次の手順に従って、Synchronizer Software Library 内へ更新プログラムをインポートします。
 - a. Synchronizer にログインします。
 - b. ナビゲーションパネルで **[Software Library]** を選択します。Actions Panel で **[Import]** をクリックします。
 - c. **[Import Software]** パネルで次のことを実行します。
 - i. 更新を識別する名前と説明を入力します。
 - ii. ソフトウェアの種類に対する **[XenClient Enterprise Update]** ラジオボタンをクリックします。
 - iii. インポートする場所とファイルを指定します。

場所	使用中のコンピューター	サーバー上のファイルインポートフォルダー
ファイル	ファイルの場所を検索し、ファイルを強調表示します	インポートフォルダーのファイルの一覧から選択します

5. 更新プログラムを登録済みのコンピューターに割り当てるには、次のようにします。
 - a. ナビゲーションパネルで **[Software Library] > [XenClient Enterprise Engine Updates]** の順にクリックし、更新プログラムを選択します。
 - b. ナビゲーションパネルで **[Computers]** タブをクリックし、Synchronizer に登録されているすべてのコンピューターの一覧を表示します。
 - c. 選択したEngineの更新プログラムを受信する各コンピューターに対してチェックボックスをオンにします。
 - d. **[Save]** をクリックします。



各選択したコンピューターが Synchronizer にアクセスすると、それぞれに Engine の新しいバージョンがダウンロードされ、次に再起動した後で使用されます。アップグレードされた Engine が配信されたら、Synchronizer 上で公開された仮想マシンを実行する前に、それを停止して再起動します。

付録 : client.iniファイルのサンプル

このセクションでは、client.ini ファイルの例を示します。最新版の例については、インストールメディア (install/extra/client.ini) からコピーする必要があります。

```
#
# XenClient Enterprise install autoconfig file
#
# The XenClient Enterprise autoconfig file is comprised of multiple ini
# "sections" - denoted by square brackets at the start of a line,
# such as GLOBAL
#
# GLOBAL settings are processed first, and then overridden
# on a per MAC address section, allowing for a per-machine control
# of autoinstall parameters.
#
# Minimum parameters to perform an auto install are:
#   name
#   assettag
#   encrypt
#   keyboard
#
# The install can also perform an auto-registration upon
# first boot. The minimum parameters to perform this
# operation, (in addition to the above) are:
#   username
#   password
#   server
#   port
#
# This file is served up by the Synchronizer's MgmtInfoSvc, with
# appropriate substitutions (noted below) at:
# https://@server@/MgmtInfoSvc
#
# File format notes:
#   Sections are case insensitive
#   Keys are case insensitive
#   Values are case sensitive
#   Anything following a '#' symbol will be ignored
#   Spaces in values are not supported
#
#####
# Begin GLOBAL Section
#####
[GLOBAL]

#####
# Autoinstallation/Autoregistration control
#####

#
# Username:
# Username to register with Synchronizer. The password
# provided in the 'password' keyword below must be that of the
# user.
#   Example:
#   username = mickey-mouse
#
```

```

# If you would like register a computer for a particular user
# and you don't know his/her password, you can use the
# register-on-behalf-of feature. In this case, the 'password'
# keyword below must be that of any Synchronizer administrator
#
# Example:
#   username = Administrator|mickey-mouse
#
# Finally, if you would like MgmtInfoSvc to automatically fill
# the username, then use this special syntax to indicate so.
#
# Example:
#   username = @principal@
username = @principal@

#
# Synchronizer password for username:
# To have MgmtInfoSvc provide this value, use
# the special case @password@
password = @password@

#
# Open registration:
# If set to true, register the computer without a user
# To have MgmtInfoSvc provide this value, use
# the special case @computer_reg@
computer_reg = @computer_reg@

#
# FQDN of Synchronizer, or @server@
# To have MgmtInfoSvc provide this value, use
# the special case @server@
server = @server@

#
# Synchronizer port to use:
# port to connect (usually 443)
# To have MgmtInfoSvc provide this value, use
# the special case @port@
port = @port@

#
# Installer action:
# Supported actions:
#   uninstall
#   install - this action tries to find a free partition and unallocated
#             disk space from which to carve a partition into which it
#             installs. The installer will perform a dual boot
installation,
#             keeping other OSs in place.
#   wipeinstall - this action will cause the entire disk contents to be
#                 erased during engine installation. Make sure you have
#                 made a backup of your drive. This operation is
#                 destructive and can't be undone.
action = install

# Language used by the installer. Use the 2 letter acronym from the choices
# below.
# If not specified, the default is en (English)
#
#   en - English
#   es - Spanish
#   fr - French

```

```

#           it - Italian
#           de - German
#           ja - Japanese
#           zh - Simplified Chinese
#
lang = en

#
# Keyboard layout for XenClient Engine:
#   two character keyboard code from the following list:
#       us English (United States)
#       gb English (United Kingdom)
#       be Belgian
#       dk Danish
#       nl Dutch
#       fi Finnish
#       fr French
#       ca French (Canada)
#       sf French (Switzerland)
#       de German
#       sg German (Switzerland)
#       hu Hungarian
#       is Icelandic
#       it Italian
#       jp Japanese
#       no Norwegian
#       pl Polish
#       pt Portuguese
#       br Portuguese (Brazil)
#       ru Russian
#       es Spanish
#       se Swedish
#       tr Turkish (Q-keyboard)
kb = us

#
# Disk Encryption:
# If set to 'yes', XenClient engine system and data files will be encrypted.
encrypt = no

#
# Machine Name:
# This parameter names the physical machine at install time
# Note that this cannot be changed later. An uninstall, and reinstall
# is required to change the computer name.
#
# name = <valid hostname>
#       Composed of the letters a-z (case insensitive),
#       the numerals 0-9, and a hyphen, which must not be
#       at the start or end of the name. The whole name
#       must also be less than 64 characters long.
#
# Special Note:
# The name / asset tag can be automated via special keywords
# surrounded by @ symbols, which will be replaced
# by their corresponding DMI info from the motherboard,
# or alternately from information provided in DHCP options.
#
# If there are spaces in these values, they will be
# converted to dashes. Periods are removed.
# Note that not all manufacturers fill in all of these values.
#
# Available DMI keywords:
#       @bios-vendor@

```

```

#         @bios-version@
#         @bios-release-date@
#         @system-manufacturer@
#         @system-product-name@
#         @system-version@
#         @system-serial-number@
#         @baseboard-manufacturer@
#         @baseboard-product-name@
#         @baseboard-version@
#         @baseboard-serial-number@
#         @baseboard-asset-tag@
#         @chassis-manufacturer@
#         @chassis-version@
#         @chassis-serial-number@
#         @chassis-asset-tag@
#         @processor-manufacturer@
#         @processor-version@
#     Available DHCP keywords:
#         @dhcp-device@
#         @dhcp-ipv4addr@
#         @dhcp-ipv4broadcast@
#         @dhcp-ipv4netmask@
#         @dhcp-ipv4gateway@
#         @dhcp-ipv4dns0@
#         @dhcp-ipv4dns1@
#         @dhcp-hostname@
#         @dhcp-dnsdomain@
#         @dhcp-nisdomain@
#         @dhcp-rootserver@
#         @dhcp-rootpath@
#         @dhcp-filename@
#
name = @system-product-name@-@system-serial-number@

# Computer Asset tag:
#   assettag = Composed of alphanumeric characters, not
#             inclusive of the following: ^"\/\[\]<>():;|,|=+*&
#             Also see special note above
assettag = @system-serial-number@

#
# Control MAC address matching:
#   If set to yes, and no MAC address section matches, do not
#   continue with auto-install
require_mac_match = no

# Runs the hardware compatibility checks if this flag is set to 'yes'.
#check_hardware_compatibility = yes

# If set to 'yes' (default) when the installation is complete, the installer
# will reboot the system.  If set to 'no' then a screen is displayed
# from which a reboot can be requested.
#auto_reboot_when_installation_completes = no

# After the engine software is installed, the system will be rebooted into
# into the engine by default.  In a multi-booted system, you can
# override this behavior by specifying the string identifying the OS.
# Possible values are:
#   Engine
#   Windows 7
#   Windows Vista
#   Windows Server 2008 R2
#   Windows Server 2008

```

```

# Windows XP
# Windows 2000
# Windows NT
# <any string specified in osprober.ini in the partition>
#
# Do not enclose in quotes
#boot_default_entry = Engine

# Set this key to one of the valid values for boot_default_entry in order
# to boot into this OS once. Subsequent reboots will go to boot_default_entry
# Do not enclose in quotes
#boot_once_entry = Windows 7

# If set to 'yes', the installer will continue upon encountering any non-fatal
# warnings if running in unattended mode.
#
#continue_on_warning = no

# If set to 'yes', the installer will abort upon encountering any non-fatal
# warnings if running in unattended mode.
#
#abort_on_warning = no

#####
# Recovery partition control
#####

# This flag is used only when 'action' is set to 'install' and unallocated
# space meeting the minimum installation requirements is not found on disk.
# In this case, the installer will examine the existing partitions for free
# space and reduce the partition to free up the space for use by the installer.
# If set to 'no' and no unallocated space is found, then the installer
# cannot continue and will abort. Also, if after shrinking the existing
# partitions enough unallocated space can't be created, then the installer
# will abort.
#shrink_partitions_if_no_disk_space_is_found = yes

# This flag is used only when 'action' is set to 'install'
# If set to 'yes', this will cause the installer to always shrink a
# partition first (before looking for unallocated space) and then
# determine if enough unallocated space exists to proceed.
#always_shrink_partitions_first = no

# This value can be set to the preferred size that the installer should
# attempt to obtain when it shrinks the NTFS partitions. By default the system
# will shrink as much as it can - leaving approximately 10% of available space
# for NTFS. If this is set to a numeric value, then the installer will
# attempt to obtain that much space in gigabytes. If it is set to a non-numeric
# value, then the assumption is that the user wants the maximum possible shrink
# (same as if it is not set at all)
#preferred_engine_partition_size_gb=max

# This value can be set to the minimum size that the installer should require
# when shrinking the NTFS partition. This value cannot be less than the
# system minimum (currently 8GB + the size of the recovery partition). If set
# to a numeric value, the system will not install unless there is at least this
# much disk space available for shrinking. If set to a non-numeric value,
# the system minimum will be used. If both a minimum and a preferred size
# are specified, then the system will attempt to get the preferred, but
# if that much space is not available, will use a smaller size as long
# as it exceeds the minimum.
#minimum_engine_partition_size_gb=min

```

```

# If set to 'yes'. this flag will cause an engine partition to be allocated
# and created from the available disk space. If no space can be allocated OR
# no free primary partition can be found, then installation will not continue,
# unless overridden by 'continue_on_no_space_for_recovery_partition'
#create_engine_recovery_partition = yes

# If set to 'yes' (default) the recovery partition will be marked as hidden.
# If set to 'no' it will be marked as visible.
#
# When visible, a partition will be automounted by Windows and assigned a drive
# letter, which may allow someone to make undesirable changes to the recovery
# partition
#hide_recovery_partition = yes

# If set to 'yes', this flag will cause any VMs in the nxdtop-import directory
# of the installation media to be copied to the recovery partition.
# If set to no (default), the recovery partition will contain ONLY the files
# needed to reinstall the engine itself. No VMs are copied.
#copy_vms_to_recovery_partition = yes

# If 'create_engine_recovery_partition' is set to yes but no space or primary
# partition can be allocated the installation will fail unless this flag
# is set to 'yes'. If set to 'yes', installation will continue but not
# create a recovery partition.
#continue_on_no_space_for_recovery_partition = yes

# When this flag is set to 'yes' (default), the installer will import the VMs
# into the engine. If set to 'no', the installer will not import VMs.
# VMs to be imported should be placed in the directory /nxdtop-import
#import_vms_into_engine = no

# When the installer is run in automated mode, the answer to its questions
# come from this file. They are used to answer the normally visible user
# screens. By default, those screens are not shown. If you would
# like to show the screens for a specified amount of time before
# moving on to the next question, set the variable below to the number
# of seconds to display the screen for.
# A value of 0 means don't display the screens.
#screen_display_pause=10

# Recover disk partitions on first boot.
# Under special circumstances, an installation may want to preserve
# present disk partitions during installation but then upon the engine
# first booting up, the user may want to reclaim the space taken up by
# those partitions.
# Set to "yes" to enable this feature. The default is "no"
#
# WARNING: This is a destructive operation that can't be undone. It is
# an advanced feature that should only be used under Citrix's customer
# support guidance.
#reclaim_all_disk_partitions_on_first_boot=yes

#####
# Begin per MAC address section overrides
#####

#[XX:XX:XX:XX:XX:XX]
#name =
#assettag =
#encrypt =
#username =
#password =

```